

3. 栽培漁業総合推進事業費

1) ニゴロブナ資源状況調査結果

根本守仁・太田滋規

【目的】 ニゴロブナは、滋賀県の伝統的な特産物であるふなずしの原材料であり、琵琶湖漁業における重要漁獲対象種のひとつに位置づけられている。その漁獲量はブナ全体についてみると、昭和40～50年代には500～800トン程度であったのに対し、平成13年には102トンと、大幅に減少している。このため、平成9年度から資源回復を目的として資源管理型漁業を推進してきているところである。ここでは、資源回復の基礎的なデータを得ることを目的に、冬季における資源状況の調査を行った。

【方法】 調査には、平成14年11月28日から平成15年3月26日に、漁業者3名によって琵琶湖北湖で沖曳網により特別採捕許可を得て漁獲されたニゴロブナを用いた。標本は、冷凍保存後に解凍したものを基本とし、体型を測定した。

【結果】 沖曳網で漁獲されたニゴロブナは839個体であった。漁獲されたニゴロブナの体長組成を図1に示した。漁獲されたのは体長50.22～224.50mmの個体であり、体長組成は119mmを境界として2つのピークが認められた。これらについては、過年度の調査結果や標識放流魚の再捕結果から、境界値未満のものを0歳魚、それ以上のものが1歳魚以上であると判断され、調査した839個体のうち、0歳魚が506個体、1歳魚以上のものが333個体であると推定された。

次に、冬季における沖曳網による調査は、平成6年度以降、毎年実施されていることから、年度による大きさの違いを比較した。本調査は主に小型魚を中心に実施しており、全長150mm以下の個体について比較した。各年度の個体の体長組成を図2に示した。全長150mm以下の個体はほとんどが0歳魚であると推定されているが、各年度のピークについてみると、調査を実施した9年のうち4年で体長90mm前後にピークがみられたが、全体としては体長71～101mmと、年度によりばらついてきた。本年度については体長79mmおよび91mmにピークが認められたものの、平成8年度に次いで小さな個体が多かった。

なお、平成6年度以降、秋季標識種苗の混獲状況から当歳魚資源尾数を推定してきているが、本年度は平成14年4月まで調査の継続を予定していることから、推定結果は次年度に報告したい。

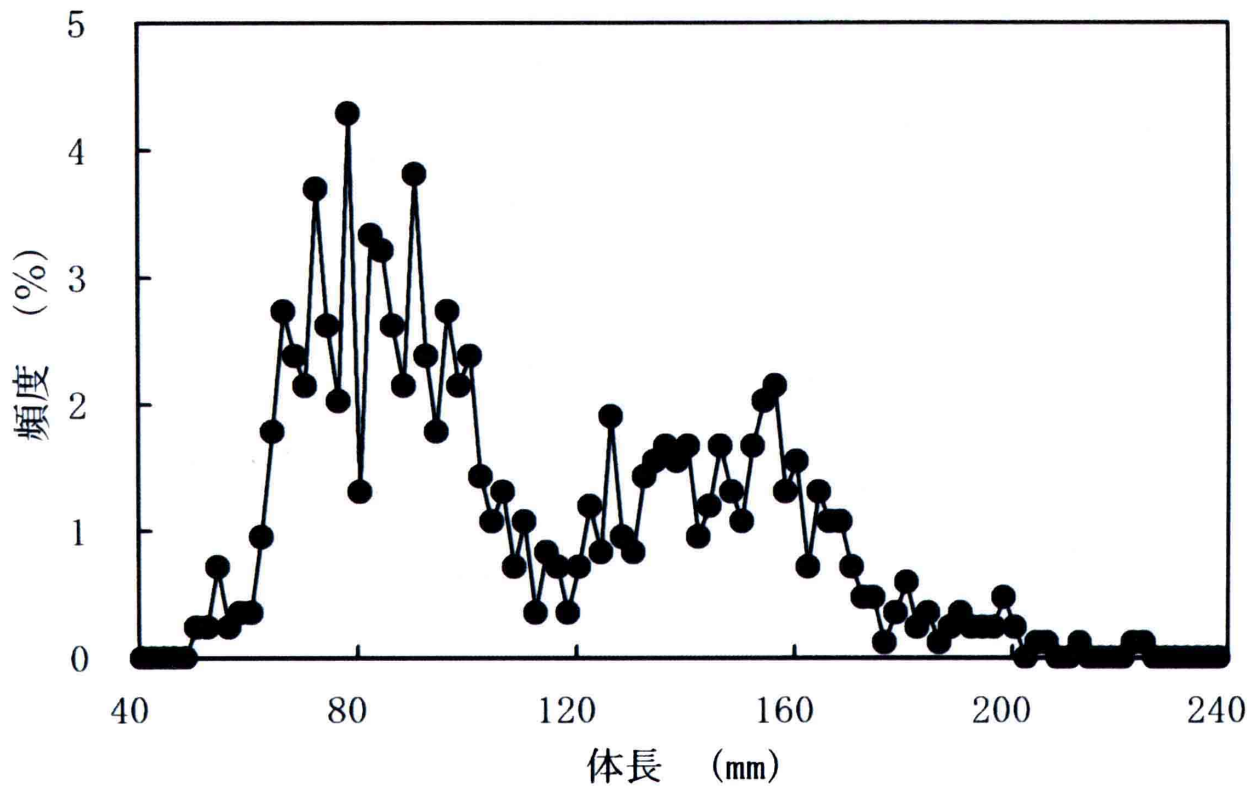


図1 沖曳網で漁獲されたニゴロブナの体長組成.

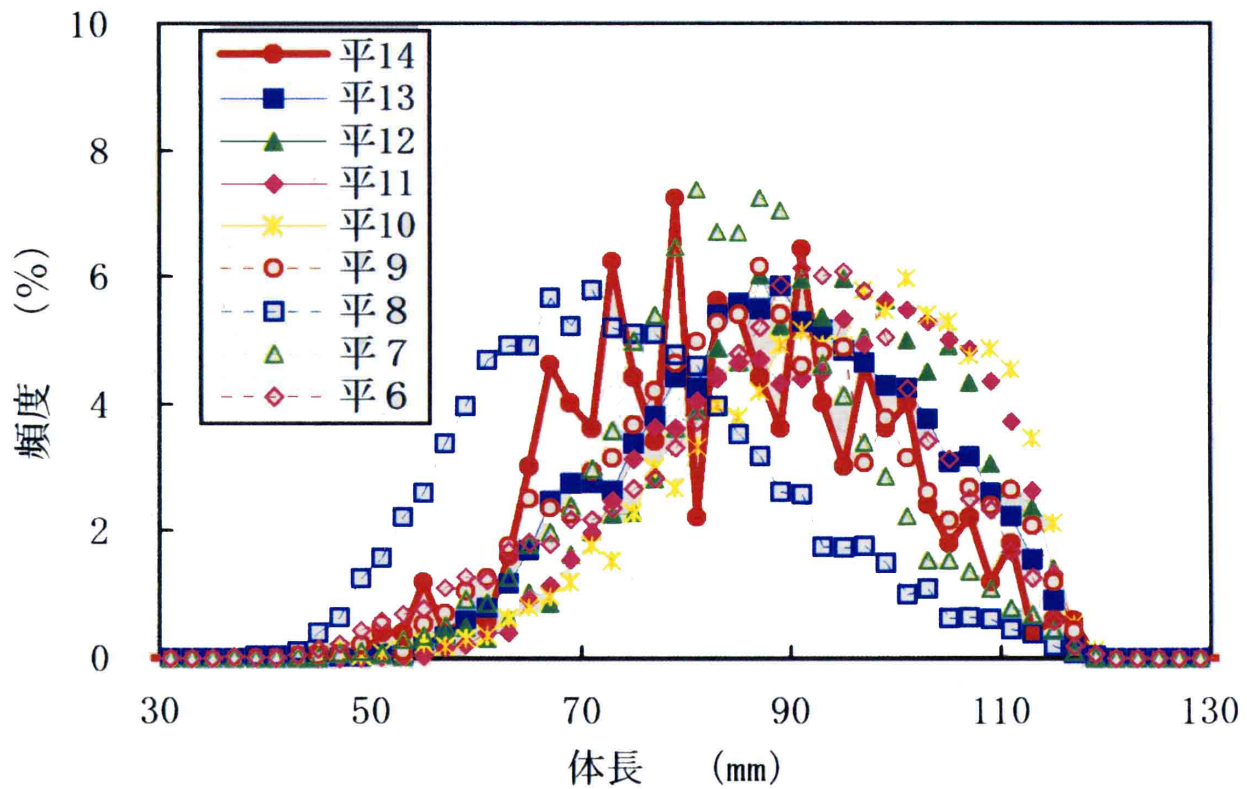


図2 平成6～14年度に沖曳網で漁獲された全長150mm以下のニゴロブナの体長組成.